

# 子どもの周辺

小林 正夫

レジリエンス (resilience) とは、英和辞典では「弾力性」「回復力」などと訳されていますが、心理学や小児医学、精神医学では「人が困難やストレスに遭遇したときにそれを克服していく能力」として使われています。

元来はリスクにさらされるという前提でレジリエンスが研究として扱わ

ていく過程で、レジリエンスを育てていくための要素として「I am 因子」「I have 因子」「I can 因子」の三つが重要とされています。「I am 因子」とは個人の生まれ持った性格です。強い性格、弱い

学校の先生の方も十分ではない(いじめ、体罰)、一人の時間を楽しむ生活や孤立した状態(不登校、引きこもり)では友達も恋人も出来ない。「I have 因子」がすべて逆に作用している現代社会です。これではとても子どものレジリエンスは育成されないでしょう。

## 子どものレジリエンス

### 困難を克服する力を育てる

れてきましたが、近年は日常的な生活や子育てなど、子どもの発達や教育分野でもよく研究がされています。現在は毎日がストレスであり、困難な状況にあるからでしょう。

性格もあるでしょう。「I have 因子」は自分を周囲から援助してくれる人の力です。幼少期の一番は両親であり、家族の力です。学校の先生や友人はもちろ

いく力であり、最終的にこれらの三つの総合力、子ども個人のレジリエンスを培っていくことになります。現代の子どものレジリエンスはどうでしょう。家庭の力が弱くなり(家庭崩壊、子ども虐待)、

子どもが成長・発達し

重要な因子となります。

庭崩壊、子ども虐待)、

(月1回掲載)



(広島大学大学院医歯薬保健学研究院長・小児科学教授)